

井上ひさし

国語事件殺人辞典

新潮社版



印刷 ■ 昭和五十七年十月三十日

発行 ■ 昭和五十七年十一月五日

著者 ■ 井上ひさし

定価 ■ 九五〇円

国語事件殺人辞典



発行者 ■ 佐藤亮一 発行所 ■ 株式会社新潮社

郵便番号 一六二 / 東京都新宿区矢来町七一 / 電話 〇三一二六六 / 業務 五一二一 / 編集 五四二一 / 振替 東京四一八〇八

印刷所 ■ 大日本印刷株式会社

製本所 ■ 加藤製本株式会社

© Hisashi Inoue Printed in Japan 1982

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

井上ひさし

国語事件殺人辞典

新潮社版

目次

化粧 5

国語事件殺人辞典 27

花子さん 145

初演記録 217

化

粧

東京下町の芝居小屋の楽屋。

舞台中央やや上手よりの最前部に、座長用の大きな鏡台。勿論、現物がなくても構わない。いや、ない方がよほどいいだろう。鏡台の枠組を針金で形どったものが置いてあってもいい。いっそ透明な鏡台であっても差支えない。この作品に実際に必要なのは、女座長を演じる一人の女優と、彼女が「いさみの伊三郎」というやくざに変身するための化粧道具、衣裳、鬘（銀杏本毛びんむしり）、それに十数曲の演歌などである。

音楽もなく何もなく明るくなると、鏡台の前で（客席から見れば「鏡台の向う側」、仮眠をとっている女がいる。大衆劇団「さつき座」の女座長五月洋子、四十六歳。

しばらくは、何も起らない。五月洋子がときおり下品に寝返りを打つぐらいである。

と、やがて、遠くで演歌が鳴りはじめる。たとえば水前寺清子の『男ならどうする』。その瞬間、女座長は天井から糸で釣りあげられたようにすっと起き上り、

いよいよ客入れがはじまったよ。

ト鏡台の斜め上方をちらと眺めて、

七月の午後六時前だというのに、ま、なんて暗い空なんだろう。土曜夜の部、書き入れどき。雨になっちゃかなわない。幕が開くまで、あと、四、五十分、それまで降らないでいてくれよ。

鏡台の斜め上方に窓があるらしい。女座長はダンヒルを咥え、金張りのライターで火を点ける。鏡台の中の自分の顔を眺めながら深々と一息吸って、煙をぷーっと自分に吹きかけた。そこへ透明な座員が透明茶を持つてくる。

ありがとう。

口に含んで透明座員を見て、

お化粧が薄いんだよ、おまえさんは。たのむからべったりと壁のように塗ってくれよ。化粧のずぼらを覚えたら、大衆演劇の役者はおしまいだよ。

ト下手で顔をつくっている座員たちをゆっくり見に行きつつ、

化粧代を吝嗇^{けち}ったばかりに素顔のボロがあらわれて、これまで大衆演劇の一座がいくつ潰れたか知れやしないんだよ。

以下、女座長は次の原則にしたがって、空間をつかう。まず下手に十人前後の座員がいる。そこで座員に対するときは下手を向く。下手の舞台袖は、この芝居小屋の舞台の袖でもある。上手には、すでにテレビ局員が透明人間として登場しているが、このテレビ局員との会話では、顔あるいは心を上手へ向ける。しかしうるさいことを言えば、指定があるまで女座長はほとんど鏡台に向って（正面切って）顔つくりを精魂をこめる。

もうひとつ、最後まで絶えず演歌レコードが「芝居小屋の表と場内」に流れているが、選曲には細心の注意が必要である。小気味よいテンポの、リズムカルなものを中心に選ばなければならない。まちがっても、たとえば美空ひばりの『悲しい酒』のような陰にこもって気の塞がってくるものを流してはいけない。ちなみにこの客寄せ演歌メドレーの選曲は座長の重要な仕事のひとつだ。べつに言えば、自分の好きな唄ばかり聞えているわけである。そこで女座長はときどき乗って軀^{からだ}をゆすりもする。

くどいようだけど、今夜がこの初日、気合いを入れて、死物狂いの舞台をつとめておくれよ。とつぱじめの前狂言から、大喜利の『歌と踊りのビッグゴールダンスステージ』まで、あ

たしが、出突張りに出まくってやろうという気になったのも、初日の今夜、迫力のあるところをたつぷり見せて、なんとか二日目以降につなごうという策略なんだからね。いいかい、精一杯調子を合せとくれよ。それからあたしの口上はいつものように切狂言が幕になってすぐだよ。（口上の稽古をやってみる）「いらっしやいませ、いらっしやいませ。ひさしぶりの御当地での興行にもかかわりませず、さっそくのお運び、まことにありがとうございます。一段高い舞台より不躰けとは存じますが、心はお客様の下座へくだりまして、厚く御礼申しあげます。本日お見立ての舞台半ばではございますが、幕間をおかりいたし、一言御挨拶申しあげます。今夜は大事な初日、前狂言『伊三郎別れ旅』、切狂言『人情話髪結新三』を無事おわらせていただき、……よかったですか？　ほんとうによかったです？　ありがとうございます。いよいよ残すところは『歌と踊りのビッグゴールデンステージ』……。そのフィナーレには『深川』を予定いたしております。全劇団員がいなせな若衆と仇な芸者に扮しまして、ぞくぞくするほどきれいなところをみていただきます。どうぞ最後までごゆるりとお遊びくださいませ。本日はまことにありがとうございました」……。

口上を言い立てながら煙草をふかしていたが、その煙草を灰皿にぎゅっと押しつけた。気に入らないのである。

われながらカッターイ口上だよ。（ちよつと考えて）「いらっしやいませ、いらっしやいませ。今を去る二十年前、わたくしの夫二代目五月龍太郎は三十一歳の若さで、この世を去りました。お客様のなかに、ひよつとしたら、そのときのことを御記憶の方もございましょうが、夫は二十年前、この劇場のこの舞台の上で、お芝居を演じている最中、突然、息を引き取っ

たのでございます」。……覚えてるよ、というお客がもしいたら、そのお客は大嘘つきだよ。たしかに二十年前、あたしの亭主は消え失せた。ただし落ち目の一座を見捨てて、鼻唄客と、両国の鉄材問屋さんの二号と手に手をとってどこかへ逃げて行ってしまったのさ。「舞台の上での死。根っからの役者であつた夫にはさぞや本望であつたらうと存じます」。初代五月龍太郎、つまりあたしのおとつあんの眼鏡にかなつて婿養子になつただけあつて、あん畜生は役者としては上の部だつた。ただし、性根のもろい、グズ男だつたねえ。「当時は、錦之助、千代之介そして裕次郎が人氣絶頂の頃、そして皆さまの御家庭にテレビがおそろしいほどの勢いで普及していた時代でございました。昭和二十年代の連日大入り超満員はまるで嘘のよう、どこの芝居小屋にも閑古鳥が住みつき、大衆演劇劇団は、昨日一つ、今日二つ、明日三つという具合に次から次へと潰れて行つておりました」……。 (透明な鏡台を睨み据えて) なんだかよく見えない鏡ねえ。「もちろん、わたしどもの『さつき座』もその例外ではございませんで、青息吐息のその日暮し。お客さまの数は多いときでも二、三十。お客様のお残しくださいませした煙草を拾つて吸わせていただくというような毎日が続いておつたのでございます。そこへ夫の突然の死、悪いときには悪いことが重なるもの、転べばバツタリ糞の上とはこういうときのことを申すのでございましょう」。十五人からいた座員が、十日もしないうちにたつたの三人になつちやつてね。それもただ逃げるのなら可愛いよ、まだ許せます。行き掛けの駄賃に、おとつあんがせつせと揃えた衣裳や鬘をくすねて逃げるんだから、つまりそれまでのあたしは泥棒を相手に芝居をしていたようなものさ。おまけにあたしは生後三カ月の乳呑児を抱えていた。あのときは赤ん坊と心中するしかないと思いつめた。「けれどもわたしどもにはお客様がついていてくださいました。その数はすくのうちございしましたが、熱心で心の温かい見巧者のお客様がついていてくださいました」。いやらしいのも

いやがったねえ。切符五十枚売るごとに一晚おれのしたいことをさせてくれろだなんて言い寄ってきてさ。こつちとしては断われないじゃないか。「そういうお客様方のご声援がこの『さつき座』を支えてくださったのでございます。ありがとうございます。ここで泣くか。「一段高い舞台より不躰けとは存じますが、心は皆様の下座しもざへくだりまして、あつく御礼申しあげます。本日お見立ての舞台の半ばではございますが、幕間をおかりいたし、一言御挨拶申し上げます。今夜は大事な初日、そこで前狂言にわたくし五月洋子の一代の当り狂言『伊三郎別れ旅』をごらんいただきました。これはわたくしの大好きな、大好きな芝居でございます。それこそ何百回となくやらせていただいておりますが、やるたびに泣けてまいります。今夜もまた泣いてしまいました。切狂言の『人情話髪結新三』は、夫の二代目五月龍太郎の当り狂言で、二十年前この舞台で倒れたときも夫は、この髪結新三を演じておりました。夫追善の思いをこめて、今夜はわたくし五月洋子が一所懸命演じさせていただきました。いよいよ残すところは『歌と踊りのビッグゴールデンステージ』……」。よし、よし、口上はこんなところでよしと。

下手の、ある所をはつきりと見て、

だれだい、こんなときに軒をかいているのは。中丸さん。市川中丸さん。中丸おじさん。
(大喝して) 中丸！ いけないよ、出での前にそう堂々と船を漕いでちゃ。『伊三郎別れ旅』はあたしと中丸さんで保もたせなきゃいけない芝居なんですよ。軒かく暇があったら、段取りのおさらいをしといてくださいよ。中丸さんは、伊三郎のおつかさん役やるのは、はじめてなんだから、すこしは気合いを入れてもらわないと……。涎を拭いて。もう一回、口のまわ

りの化粧、やり直してちょうだい。(小声で) 大丈夫かね、ほんとうに。役者の手が足りないから、今日から助けてもらうことにしたんだけど、心細い助っ人だよ、まったく。「関東大衆演劇界切つてのふけ女形おやまといわれておりました」だって。ふん、触れ込みだけは凄いだから。

このとき、上手が気になる。見て、それから下手に向い、

敏ちゃん、奥になにかいるよ。だめだよ、開演直前の楽屋に人を入れちゃ。雑用という仕事のなかには楽屋番の仕事も入っているんだよ。川崎の大島劇場で衣裳を盗まれたばかりじゃないの。堂々としているから、どっかの週刊誌の記者かなと思っていると、衣裳カゴ担いで逃げちまって……、え？ TBSテレビの方？ 閉場はなたあとでいいから一寸お話を伺いたいとおっしゃってる？ それでおあげしておいた？

上手を向き、

五月洋子でございます。

名刺を受け取り推し戴いて、

小山さんとおっしゃいますか。はじめまして。

下手へ、

敏ちゃん、お客様ならお客様と早くそう言ってくれなきゃ困りますよ。

上手へ、

ほんとうに閉場はなてからでよろしいんですか。こみ入った話だから後のほうがいい？　こみ入った話ねえ。年甲斐もなく胸がどきどきしてきましたよ。

下手へ、

敏ちゃん、お客様にビールを抜いてさしあげて。それから客席の隅の売店へちよこちよこ走りをしておでんを買ってきてちょうだい。おでんだけじゃ淋しいわね。イカの姿焼を一皿追加……。ちよつと、中丸のおじさん、あなたに頼んだわけじゃありませんよ。白塗のおばさんがイカの姿焼を捧げ持って客席を横切ったりしてごらんなさい、お客さんが肝を潰しますから。おじさんに向って「そもそも役者というものは……」なんて講釈しては、それこそ釈迦に説法というものだろうけど、役者つてのは夢を売るのが商売でしょう、舞台へ出る扮装つくりで客席をのこのこ歩いちゃいけません。え？　舞台の袖で出を待つことにする？　それで楽屋から出ようとしたのだ？　中丸のおじさん、ちよつとこつちへいらつしやい。

女座長の視線の移動。彼女の視線は自分のすぐ右隣まで来て、とまる。

中丸のおじさん、こんなこと言っちゃ何だけど、本当に女形を演ったことがあるんですか。ここまで来る歩き方にしても、足を内輪にすることにばかり気が行って、両膝がおそろかになってましたよ。膝の間に紙を挟んで、その紙を落さないように歩いてごらんなさいな。それが女形の歩き方の基本なんですから。ぼーっと突っ立っていいでさっそくやってごらんなさいよ。ほら、チリ紙あげますからさ。それでね、中丸のおじさん、そのへんを歩きながらよく聞いといて下さいよ。あたしたちはこれまで二回も『伊三郎別れ旅』の口立て稽古をしたはずですよ。二回も稽古をやって、それでも段取りがのみにこめない役者は、もう新劇にでも行くしか道がないんじゃないかしら。いいこと、この『伊三郎別れ旅』という前狂言は三場の仕立てなの。それで一場はほとんどあたしの一人芝居。銚子湊に山源というやくざの一家がある。親分の名は山本源五郎、そしてあたしは、つまり伊三郎は、この山源の若親分なんです。山源一家はやくざはやくざでも良いやくざ、親分から三下奴まで聖人のような連中が揃っている。さて、ある日のこと伊三郎はおとつあんの源五郎の言いつけで下総佐原村の香取神宮におまいりに出かけた。親分の代参ですね。それを知った伊勢辰一家が山源一家に殴り込みをかけた。伊勢辰というのは同じ銚子湊の新興やくざ、当然、全員、悪玉です。不意を襲われ、しかも腕の立つ伊三郎はいない、山源一家は一人のこらずやられてしまった。そして山源親分は虫の息……。ここで幕が開くんです。幕が開くとすぐ、帰り道で急を知った伊三郎が、「おとつあん」と呼びながら息せき切ってかけつけてくる。山源親分は伊三郎の腕の中、苦しい息の下からこう言います。

以下、『伊三郎別れ旅』の中の台詞が十数回出てくるが、それらは七五（五七、七